

いの流水俳壇

松尾 満津於選

「当季雑詠」

花合歡のふくらむ土手の通学路

井上 郁子

(評)合歡の木は山野至るところに自生して高々と成長する。多数の小葉から茂る、葉が日暮になると合掌して萎しおれるところから、合歡の花とその名を得たとされている。初夏の頃から淡紅色の花をいっぱいつける、この句の花合歡は小川に沿った土手道で通学路であり、合歡は並木であろう。春から夏に入って小学生は、ようやく学校にも馴染み初む。子供達の歌う童謡が聞こえて来るような通学路。

車椅子茅の輪をくぐるとき杖に

刈谷 志津

(評)茅の輪は「茅」(ちがや)、または藁わらをたばねて作った大きな輪。六月祓(みなつきばらい)は病氣、厄よけ、のまじ

ないとして人々にくぐらせる大きな輪のことである。車椅子ではくぐれないので、そのときだけは杖をついてくぐって厄よけをするのである。

かじか鳴く川面に雨の音はげし

筒井 文

(評)作者は卒寿に近い年令であるが、頭脳はしっかりとっていて、川面の様子、降雨の状況がよく伝わって来る。

もじずりの花序ただしく土手の道

弘瀬うき子

(評)もじずり草は廃屋の庭や、芝地などに野生する細長い葉を二、三枚生やし、莖梢に穂をつけ淡紅色の小花を咲かす、この穂が振れているので振花ともいう、じつと見ていると他の草と異って可愛いらしい花である。土手道を歩いて居ればすぐ眼につくというように目立つ花ではないので、入念にしゃがんで見ないと気付かないが、じつと見つめていると何となく滑稽で可愛らしい。

青田風島に一つの信号機 植田 紀子

緑蔭にしばし憩うや乳母車 森元二美子

なにかある虫袋のふくらみて 津田 久美

ほの暗き水の匂いす木下間 秋田 律子

苔清水木立の中に生活跡たつき 竹崎 光子

半夏生農に勤しむ雨合羽 川村 博子

水の行く風の濃淡合歡の花 友草 水月

顔ほどの煎餅もらう夏祭り 間 浩太

包み込むこの夕暮や梅雨の冷 大川 節弥

朝市の策に顔出す茗荷の子 岡本とも子

街路樹の楊梅赤く呼んでいる 森岡 照月

声かけて初なりトマトもぎにけり 中野 好子

紫陽花のいろ鮮やかに塀に競う 楠目 哲郎

高塀に山梔子白き香を放ち 片岡 包女

夏の夜や眠れぬままに明けにけり 川村 愛

天青き村の棚田のあめんぼう 伊藤 たみ

廃屋の古りゆくまや蝉しぐれ 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」
締め切り 毎月第2月曜日まで

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

今月のことも川柳

ふうりんがちりちりり おどてる

清水第一小1年 いとうりさ

のりまきを野原で食べるのうさぎと

下八川小2年 つついみなみ

